
Listening Comprehensionの伸長を目指した 授業形態と教材の検討

佐藤 猛 郎
松田 治
佐藤 敏 子
岩田 保子
石垣 明 子
加藤 百合
中村 典 生

1. はじめに

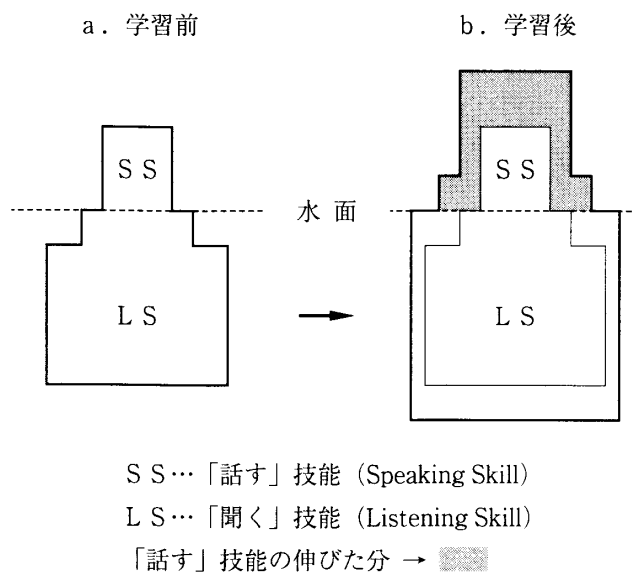
言語を学ぶとき、身につけなければならない技能には、「読む (reading)」「書く (writing)」「聞く (listening)」「話す (speaking)」の4つがある。国際化する社会の要請から、近年わが国の英語教育ではコミュニケーション活動の重視が叫ばれており、これら4つの技能のうち、特にコミュニケーション活動の根幹をなす「聞く」こと「話す」ことに注目が集まっている。

浅野 (1980) によると、上述の4つの技能は2つずつに分類される。一方は「書く」「読む」技能であり、他方は「話す」「聞く」技能である。更に浅野は、分類された2つずつの技能において、「書く」技能は「読む」技能を、「話す」技能は「聞く」技能をそれぞれ土台としているという「冰山効果 (Iceberg Effect)」を提唱し、その経験的証拠を示している。次ページの(1)が冰山効果のモデルである。このモデルは、水面上にある「話す」技能を伸ばすには、ただ「話す」技能の訓練のみを行うのでは不十分であり、土台である「聞く」技能が伸びてこそ結果的に「話す」技能の伸長が実現され得るということを示している。

「話す」技能の伸長が「聞く」技能の伸長に依存するという浅野の主張が正しいとすると、日本の英語教育の課題である「聞く」「話す」という両技能の伸長を達成するには、「聞く」技能の伸長が最重要であることになる。

以上のように、「聞く」技能の伸長は現在最も注意が払われるべき課題であるように思われるが、ただし、ここでの「聞く」とは、耳からの音の刺激を単に受容することだけを意味しているのではない。耳から受容したその音には構造があり、意味をなすものとして分析的に「聞き取る」ということなのである。吉田 (1984:47) は、「聞き取り」には(2)のような問題がかかわることを示している。

(1) 冰山効果



(2) a. 音声上の問題

b. 語意の問題

c. 文法能力の問題

d. 背景的知識の問題

本稿ではこの中で(2a)の音声上の問題を取り上げ、「聞き取り」(Listening Comprehension) (以後LC)の技能を伸ばすにはどのような教材や授業形態が有効であるかについて検討する。

2. 研究目的

- (1) 音素識別訓練 (Minimal Pair Practice) (以後MPP) と LC, 音素知覚 (Aural Perception) (以後AP) の相関関係について調べる
- (2) 速音読 (Oral Speed Reading) (以後SR) と LC, APの相関関係を調べる
- (3) LCの伸長にはどのような授業形態と教材が有効であるかを調べる

3. 方法とその意味

(1) 方法

① 調査計画

a. プレテスト

1年生の8つのクラスにおいて、LCに関するテスト (以後STEP…資料1) とAPに関する

るテスト(資料2)を行い入学時の生徒の技能を測る

b. 統制群, 実験群の設定(()内の数字はクラス数を表す)

プレテストを行った8クラスの授業形態を

- i. SRのみを行うクラス(1)
- ii. MPPのみを行うクラス(1)
- iii. SRとMPP両方を行うクラス(5)
- iv. SRもMPPいずれも行わないクラス(1)

に分け通年授業を行う

c. STEPとAPのポストテストを行う

d. テストの誤答分析を行う

②対象者

つくば国際大学産業社会学部平成6年度入学者第1学年

③教材

MPP教材:『英語ヒアリングトレーニングCD入門編』TDKコア

SR教材:『英語スピード・トレーニング教本』大修館

(2) 調査方法の意味

①MPPの意義と問題点 — 第二言語習得とMPP —

本稿に関する英語教育とは、正確には第一言語をすでに習得した人に対する第二言語としての英語教育ということである。したがって、人間がいかにして第二言語を習得するかという根本的な問題は、いかなる教材を設定するかという背景として必ずふまえておかなければならない。本節では、人間の言語習得の見地からMPPという学習法の持つ意味合いを概観し、今回の調査の意義について考える。

例えば、転勤で家族ともども海外に移り住むと、子供が最初に言葉を覚えてしまうという話はよく聞く。事実、ある一定以下の年齢の子供は母国語と異なった言語環境に置かれても、第一言語同様自然に第二言語を習得するが、一定以上の年齢の人がそれと同じ言語環境にさらされても、習得の速さ、精度ともに一定以下の年齢の人よりはるかに劣ることが知られている。

生成文法(Generative Grammar)^①では、人間は生得的に言語習得装置(Language Acquisition Device)を頭の中に持っており、上の例で述べた一定の年齢がこの言語習得装置の臨界期であるという立場をとっている^②。言語習得の理論は人間の脳や遺伝の問題にもかかわるので未解明の部分も多い。しかし、以上のような経験的事実をふまえると、第一言語既習者にとっては、第一言語習得とまったく同じような形では、第二言語は習得することができないとすることができる^③。

それでは第一言語の習得と第二言語の習得に差異が生じる理由は何だろうか。平たく言えば、すでに習得している第一言語の影響力が第二言語にまで及ぶことであると言えるように思われる。

卑近な例を考える。英語を母国語とする人の日本語がなんとなくたどたどしく聞こえる理由のひとつとしては、日本語が音節拍子の言語(Syllable-timed Language)であるのに対し、英語は強勢

拍子の言語 (Stress-timed Language) なので、強く言う音節を必要以上に長く発音してしまうということがある。また、英語の [ɑ, ʌ, æ, ə] 等の母音を日本人が聞いたとする。日本語でこれらの母音に相当する音は全て「ア」という文字で表される音になるので、われわれはこれら全てを区別できずにアと聞いてしまう⁴⁾。これらの例は、第一言語の影響が第二言語に及んでいるという証拠である。

このような第一言語の第二言語に及ぼす影響を取り払うためには、第一言語と第二言語の違いを知る必要がある。ただし繰り返すが、言語習得の臨界期を越えている人たちにとって、ただやみくもに英語を聞いても、すでに習得している日本語の影響で言語間の違いを知ることは非常に難しい。

この循環的な困難さを打開する方法は、日本語、英語間の違いを明確な形で提示することである。違いを提示されることによって、我々は簡単にその違いに気付くことができるのである。

MPPは日本語にない音素を導入し、その区別を明確にしようとする訓練である。よって、日本語の影響を排除し、日本語にない音素を習得するという意味では、我々日本人にとってMPPは非常に有効な学習法であると考えられる。

しかし、音素識別力の伸長とLCの伸長の相関関係は別の問題である。次節で詳しく述べるが、竹蓋 (1984) が言うようにリスニングは総合的行動であると考えられるので、LCとの関連でMPPを考えると、音素識別以外のLCにかかわる要件も考慮しなければならなくなる。実際 Adam Brown (1995) では、MPPがLC伸長にかかわるかどうかにについては否定的な見解が述べられている。また板倉 (1971) では、最初は効果を示さなくても、学習を重ねるにつれてMPPがLCの伸長とつながるとの見解が示されている。

上述のように、MPPは第二言語としての英語の音素の習得を目指すには最適な方法であると考えられることができるが、その識別力伸長とLCの伸長との相関関係は明らかにされなければならない残された問題である。今回の調査はこのMPPとLCの関係を明らかにする意味を持つものである。

②SRの意義

今回の調査の関心事はSRという学習法がLCに有効であるかどうかということを確認することである。本節では、リスニングそのものの特性を分析し、SRがLC伸長に有効であると考えられる2つの理由を提示する。

リスニングについて総合的、科学的研究には竹蓋 (1984) などがある。竹蓋はリスニングとは様々なことを同時に行っている総合的行動だと捉え、その主だったものの中にはつぎのようなものがあると述べている。

- (3)a. 次に来る音を予測する
- b. 音を注意深く聞き取る
- c. 聞き取った音をしばらく記憶する
- d. 聞き取った音を既知の語のリストと照合する
- e. 語のつながりを構造的に分析する

コンピューターの世界では、情報の並行処理は非常に困難であるとされている。そうすると、人間は無意識にコンピューターが足元にも及ばない驚くべき処理を行っていることになる。

しかし、第一言語においては、このような処理が無意識に自然にできることなのであるが、第二言語のリスニングを行うときはそう簡単にはいかない。例えば既知の語のリストとの照合に時間がかかったり、語のつながりの構造分析に手間どったり、そうしてうちに話はどんどんすすんで、といったとまどいは、おそらく英語を学習した人ならば一度は経験してきたことではないだろうか。

以上をふまえると、リスニング技能の伸長とは、流れ行く第二言語の音の並行処理を、より迅速にかつ正確に行うことができるようになることであると考えることができる。

更に竹蓋は人間は(3)のような他からの音刺激を処理するのと非常に似ている並行処理を、自らの発話時にも行っているということを示唆している。つまり、まず何を言うのか考える。その考えたことを発話しながら、その発話をモニターしつつ記憶し、更に次に何を言うか考える。まさに多重的並行処理である。

もしこのように発話がリスニングと類似した並行処理を含むものであるならば、意味を考えながら自分の発した音をモニターしつつ音読のスピードトレーニングを行うことは、音の並行処理の訓練になり、リスニング技能の伸長にもつながる可能性があると考えられる。これが、SRがLC伸長に有効であると考えられる一つめの理由である。

また、SRは記憶の強化という面でLCに効果を与える可能性がある。

人間には2つの記憶の形態がある。短期記憶と長期記憶である。人間の脳は有限なので、コストを下げるために必要なものだけを取捨選択し、長期の記憶として残しておく傾向がある⁽⁶⁾。よって我々が日常接する変哲のないことの大部分は長期の記憶としては残らず消えて行く。

例を考えてみる。電話帳で番号を調べてかけてみると話し中。3分待ってかけ直そうとしたら番号が思い出せない。これは短期間は記憶していたのであるが、永続的な記憶としては残っていない典型的な例である。しかし、自分の家の電話番号や、何度もかけたことのある電話番号は、逐次電話帳を調べるまでもなく記憶できていてたやすく思い出せる。これは必要に応じて何度も記憶が強化されたため、ある数字のつながりとその意味が長期の記憶として頭の中に保存されたのだと説明できる。単語の意味やストレス、文のリズムなどもこれと同様である。SRでは、意味を考えながら極力自然な形で何度も英文を繰り返す作業が行われるので、その英文に関する様々な特性が強化される。そしてその強化された特性が、記憶として定着され得ると考えることができる。こうして得られた英文の特性に関する様々な記憶は、リスニングを行う際に知識として利用され、LCの助けとなると考えられる。これがSRがLCの伸長に有効であると考えられる2つめの理由である。

以上のようにSRがLC伸長に関して有効であると考えられる2つの理由を示した。しかし、SRとLCの相関関係を測った分析的データは佐藤(1993)を除いては皆無に等しい。今回の調査結果はSRとLCの関係を知らるための重要なデータとなると思われる。

4. 結果

(1) 実験群ごとの結果

クラスごとによるプレテスト・ポストテストの点数の平均とその上昇率をまとめたものが表1である。

表1-aはSRとMPP両方を行った生徒122人の結果をまとめたものである。STEPに関してはプレテストの平均が6.9, ポストテストの平均が7.1, 上昇率は2.90%である。APに関してはプレテストの平均が37.4, ポストテストの平均が, 40.8, 上昇率が9.09%であった。

表1-bはSRのみを行った生徒9人の結果をまとめたものである。STEPに関してはプレテストの平均が5.8, ポストテストの平均が7.3, 上昇率は25.86%である。APに関してはプレテストの平均が37.0, ポストテストの平均が, 37.0, 上昇率は0であった。

表1-cはMPPのみを行った生徒25人の結果をまとめたものである。STEPに関してはプレテストの平均が7.5, ポストテストの平均が8.2, 上昇率は9.33%である。APに関してはプレテストの平均が38.0, ポストテストの平均が, 42.1, 上昇率は10.79%であった。

表1-dはSRもMPPも両方とも行わなかった生徒27人の成績をまとめたものである。STEPに関してはプレテストの平均が6.9, ポストテストの平均が6.7, 上昇率は-2.90%であった。APに関してはプレテストの平均が37.0, ポストテストの平均が, 48.8, 上昇率が4.86%であった。

表1-eは, 表1-aから表1-a~dまでの成績を全体としてまとめたものである。総受験者数183人。STEPに関してはプレテストの平均が6.9, ポストテストの平均が7.2, 上昇率は4.35%である。APに関してはプレテストの平均が37.4, ポストテストの平均が, 40.5, 上昇率が8.29%であった。

表1 実験群ごとの結果

a. SR AND MPP (122)

	pre	post	上昇率
STEP	6.9	7.1	2.90%
AP	37.4	40.8	9.09%

b. SRのみ (9)

	pre	post	上昇率
STEP	5.8	7.3	25.86%
AP	37.0	37.0	0.00%

c. MPPのみ (25)

	pre	post	上昇率
STEP	7.5	8.2	9.33%
AP	38.0	42.1	10.79%

d. 実施せず (27)

	pre	post	上昇率
STEP	6.9	6.7	-2.90%
AP	37.0	38.8	4.86%

e. 全体 (183)

	pre	post	上昇率
STEP	6.9	7.2	4.35%
AP	37.4	40.5	8.29%

(2) 実験群ごとの STEP・APの上昇率の比較

表2は表1のデータから実験群ごとのSTEPの上昇率を比較したものであり、またそれをグラフ化したものが図1である。

表3は表1から実験群ごとのAPの上昇率だけを抜粋したものであり、それぞれをグラフ化したものが図2である。

表2 STEPの上昇率の比較

	STEPの上昇率
全 体	4.35
実施せず	-2.90
MPPのみ	9.33
SRのみ	25.86
MPP AND SR	2.90

表3 APの上昇率の比較

	APの上昇率
全 体	8.29
実施せず	4.86
MPPのみ	10.79
SRのみ	0.00
MPP AND SR	9.09

図1

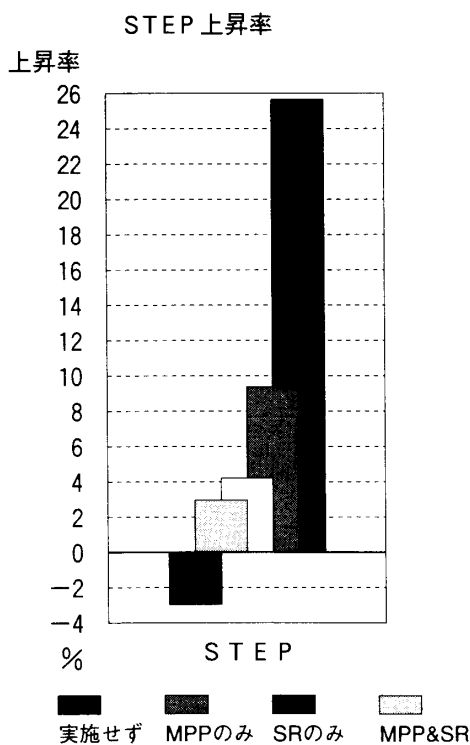
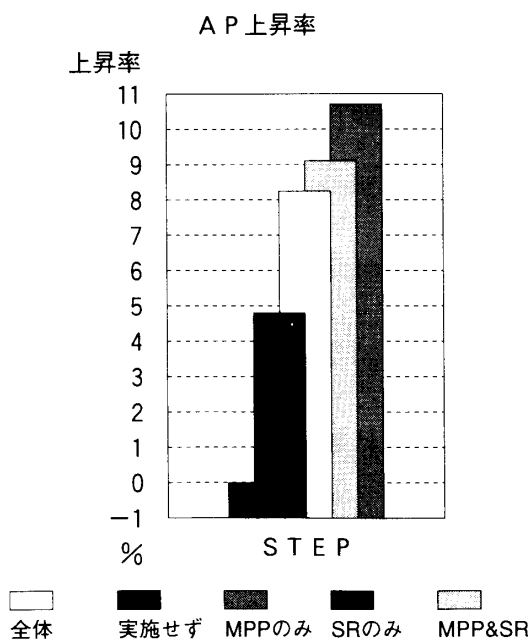


図2



(3) MPP・SRそれぞれを行った生徒と行わなかった生徒の成績比

表4は(a)SRを行った生徒と行わなかった生徒のSTEPに関する成績上昇率と(b)MPPを行った生徒と行わなかった生徒のAPに関する成績上昇率を比較したものであり、それぞれをグラフ化してまとめたものが図3である。

STEPに関しては、SRを行った生徒のプレテストの平均が6.8、ポストテストの平均が7.1、上昇率は4.25%であった。一方、SRを行わなかった生徒のプレテストの平均は7.2、ポストテストの平均が7.4、上昇率が4.36%であった。

APに関しては、MPPを行った生徒のプレテストの平均が37.5、ポストテストの平均が41.0、上昇率は9.33%であった。一方MPPを行わなかった生徒のプレテストの平均は37.0、ポストテストの平均が38.4、上昇率が3.64%であった

表4 授業形態によるSTEP・APの伸長度比較

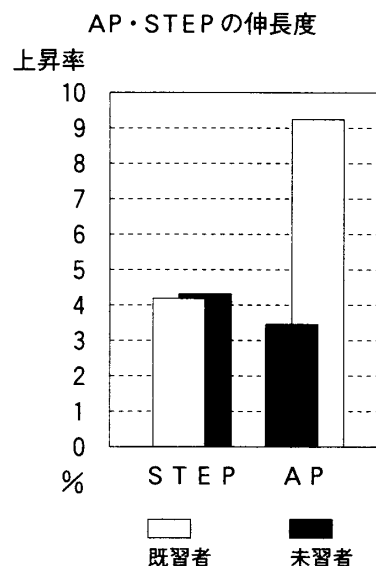
図3

a. SRを行った生徒と行わなかった生徒のSTEPの伸長度

	pre	post	上昇率
行った人	6.8	7.1	4.25%
行わなかった人	7.2	7.4	4.36%

b. MPPを行った生徒と行わなかった生徒のAPの伸長度

	pre	post	上昇率
行った人	37.5	41.0	9.33%
行わなかった人	37.0	38.4	3.64%



5. 考察

上記のような結果に対して、次のような観点から考察する。

- ①MPPとAPの関係について
- ②MPPとLCの関係について
- ③SRとLCの関係について
- ④SRとAPの関係について
- ⑤MPPとSRのLCに関する相関関係について

①APの伸長に関してMPPが有効であると考えられるデータが表3と図3である。このデータから、APの伸長度に関して、MPPを行った生徒と、行わなかった生徒との間に大きな差があることがわかる。この結果から、MPPは英語のAPの伸長のための非常に有効な学習法であることは明らかである。

②LCの伸長に関してもMPPが有効であると考えられるデータが表1-Cである。ここでは、MPPしか行っていない生徒のSTEPの成績が著しく伸びている。この結果は、MPPがLCに参与し得ることの強力な支持となるものである。また、表1-aと表1-bを比較すると、MPPとSR両方を行った生徒の伸長度が、SRだけを行った生徒の伸長度よりも劣ることは、一見、MPPがLCの伸長に関して負の要因であるとも考えられる。しかし、伸び率は少ないものの、伸びていることには変わりなく、また、音素識別力の向上がLCの負の要因である理由が考えにくい。以上より、MPPとLCの伸長とは、かなり高い可能性で相関関係があると言いきそうである。

③SRがLCの伸長に有効であると考えられるデータが表1-a, bである。ここではSRを行った生徒のSTEPの成績の伸長がみられ、特に、SRだけを行った1-bのデータでは、25.86%という飛躍的な伸長がみられた。以上より、SRとLCの伸長との相関関係は明らかであるように思われる。

④SRがAPの伸長に関してはほとんど関与しないと考えられるデータが表1-bと図表3である。表1-b図では、SRだけを行った生徒のAPの伸長がまったく見られない。また、表1-bと表1-dのAPの伸長度をデータを総合した図表3からも、MPPを行わなかった生徒のAPの伸長度が非常に低いことがわかる。以上より、SRとAP伸長の相関性はほとんどないと言いきよう。

またこの結果は、母国語である日本語の影響から逃れて、日本語にない音を識別できるようになるためには、その識別用に作られた訓練が必要であるという、3節(2-②)での議論を証拠づけるものであると考えられる。

⑤LCの伸長に関して、MPPとSRが大きなプラスの相乗効果をもたらすわけではないと考えられるデータが表1-aである。例えば、②でも少し述べたが、SRのみしか行っていない生徒(表1-b)のSTEPの伸長度に比べると、両方やった生徒の伸長度は明らかに低いことから、MPPとSRのプラスの相乗効果が希薄なことがうかがえる。

しかし、注意を要するのはMPPもSRもどちらも行わなかった生徒(表1-d)のSTEPの成績は、上昇どころかマイナスになっていることである。このことから、両方ともやらないと伸長は望めないという結果になる。以上より、表1-bと表1-dを比べる限りにおいて、MPPとSRのLC伸長に対して相関関係があるかどうかということについてはもう少しデータをとって考える必要があるように思われる。今後の課題としたい。

6. まとめと展望

4での考察の要旨を簡単にまとめると次のようになる。

- (4)a. MPPはLC伸長に有効である
- b. MPPはAP伸長に有効である
- c. SRはLC伸長に有効である
- d. SRはAP伸長には有効ではない

以上より、MPP・SRともLCの伸長を目指す授業では有効であるということができよう。

今後の展望として考えられることの一つとしては、SRよりも更にもっと有効な方法があるのかということである。

その一つの可能性としてあげられるのがシャドウリーディング (Shadow Reading) である。SRの意義は、LCにおける情報並行処理能力の向上と記憶の強化ということであった (2節 (2-②) 参照)。しかし、一旦文を聞いた後でそれを繰り返すのでは、完全な英語のリズムやイントネーションを模倣できていない可能性がある。その欠点を克服することができると考えられるのがシャドウリーディングなのである。これは、テープが流れた後に繰り返すのではなく、テープの発話に合わせて一緒に読む作業である。よって、自分の発話を直接母国語話者の発話と比べることができ、ネイティブと同じレベルでの情報並行処理練習および記憶の強化ができることが期待されるのである。シャドウリーディングに関しては今後の研究課題としたい。

(さとう・たけろう 産業情報学科)
(まつだ おさむ 社会福祉学科)
(さとう としこ 産業情報学科)
(いわた たもつ 社会福祉学科)
(いしがき あきこ 産業情報学科)
(かとう ゆり 社会福祉学科)
(なかむら のりお 産業情報学科)

脚注

- (1) チョムスキーによって打ち立てられた理論。生成文法理論に関しては、Chomsky (1986), Chomsky & Lasnik (1991), Chomsky (1992), 原口・中村 (1992), 中村・金子・菊地 (1989) などを参照のこと
- (2) LADが存在するかどうかに関する議論はHornstein & Lightfoot (1981) を参照のこと
- (3) 生成文法の考え方と第二言語習得かかわりについての総合的研究は、Lynda White (1989) を参照のこと
- (4) 第一言語の知識が第二言語に影響することを Liberman (1961) は acquired similarity あるいは acquired distinctiveness と呼んでいる。

- (5) acquired similarity が起こることは脳の特徴から考えても当然である。人間の脳は有限であるため、コストを下げる意味で区別する必要のない区別は行わないで、物事を大ざっぱに捉える(汎化する)という傾向を持っている。よって、日本語において区別する必要のないこれらの音は、意識して区別しないかぎり、聞き分けられないのである。(中村(1994), 千葉(1991)を参照)
- また、中村(同上)は「人間は知っていることしかわからない」と述べて、人間はすでに持っている知識を通してしか情報を処理できないということを示している。この考え方によると、acquired similarityの類は、その人が持っている限りの知識を使って行く、必然的な情報処理行為であると考えることができる。
- (6) 記憶に関する議論は、千葉(1991), 柳澤(1995)などを参照のこと

参考文献

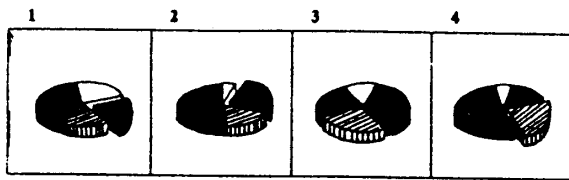
1. Adam Brown 1995 "Minimal Pairs: minimal importance?," *ELT-Journal* vol. 49/2, 169-75.
2. 浅野 博 1980 "In Defense of the Language Laboratory," 『外国語教育論集1』The Foreign Language Center, University of Tsukuba.
3. 千葉康則 1991『記憶の脳生理学』東京：講談社.
4. Chomsky, N. 1986 *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, New York: Praeger.
5. Chomsky, N. 1992 "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *MIT Occasional Papers in Linguistics*, NO. 1, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
6. Liberman, A. M. 1961 "Some Results of Research on Speech Perception," *Psychological Linguistics*, (S. Saporta, ed.) Holt, Reinhart & Winston, New York, 142-153.
7. Lydia White 1989 *Universal Grammar and Second Language Acquisition*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/-Philadelphia. 千葉修司・ケビンレグ・平川真規子(訳)1992『普遍文法と第二言語獲得』東京：リーベル出版.
8. 原口庄輔・中村 捷 1992『チョムスキー理論辞典』東京：研究社.
9. Hornstein, N. & D. Lightfoot (eds.) 1981 *Explanation in Linguistics: The Logical Problem of Language Acquisition*, London, Longman. 今井邦彦(監訳)『チョムスキー理論と言語習得』東京：新曜社.
10. 板倉武子・後田富久子 1971「英語の聴覚理解と読解力について」『Language Laboratory』vol. 10, 3-14.
11. 中村 捷・金子義明・菊地 朗 1989『生成文法の基礎』東京：研究社.
12. 中村典生 1994「笑いの構造」『平成5年度土浦第一女子高等学校研究紀要』97-112.
13. 佐藤敏子 1993「コミュニケーションを目指したリーディング指導—読解力と未知語彙予測力」『筑波大学学校教育論集』第16巻, 171-189.
14. 竹蓋幸生 1984『ヒアリングの行動科学』東京：研究社.
15. Ted Gregory 1991『英語スピード・トレーニング教本』東京：大修館.
16. 柳澤桂子 1995『脳が考える脳』東京：講談社.
17. 吉田一衛 1984『英語のリスニング』東京：大修館.

(資料1) STEP問題-1

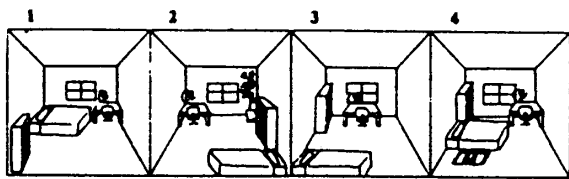
Pre Test (Listenig Comprehension) ①

[第1部]

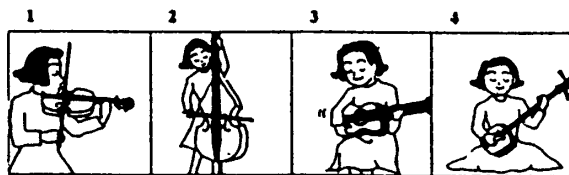
No. 1



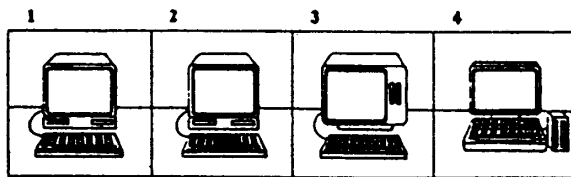
No. 2



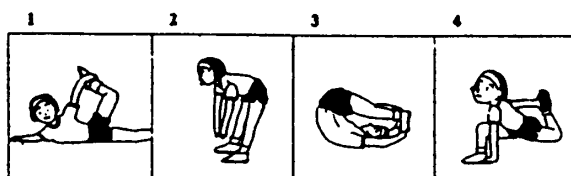
No. 3



No. 4



No. 5



[第2部]

No. 6

- 1 "A cool guy has asked me for a date. He's a hunk."
- 2 "It's a new tape. It's really good."
- 3 "I thought you knew what it was."
- 4 "I'd better make a new friend right now."

No. 7

- 1 "I failed in quitting smoking."
- 2 "So, did I."
- 3 "Why don't you try it again?"
- 4 "Who knows?"

No. 8

- 1 "Yes, I watched the weather report on TV."
- 2 "Yes, it depends on the weather."
- 3 "No. It is likely to rain this afternoon."
- 4 "No. Why don't you look it up in the yellow pages?"

No. 9

- 1 "Oh, do you?"
- 2 "Me, too."
- 3 "It's my pleasure."
- 4 "That would be nice."

No. 10

- 1 "Didn't you have breakfast?"
- 2 "I've prepared beef steak."
- 3 "It's my turn to cook."
- 4 "Let's watch a baseball game on TV together."

(資料1) STEP問題-2

②

[第3部]

[第4部]

- No. 11
- 1 Ten people.
 - 2 Thirteen people.
 - 3 Twenty people.
 - 4 Twenty three people.
- No. 12
- 1 She has no wish to tell the way to a stranger.
 - 2 She has already shown him the way.
 - 3 She doesn't know the way either.
 - 4 She is asking him for directions.
- No. 13
- 1 He's preparing for the term paper.
 - 2 He's preparing for the exams.
 - 3 He's helping her with the term paper.
 - 4 He's helping her with the exams.
- No. 14
- 1 He will find the Suzukis on his left.
 - 2 He will find a big drugstore on his left.
 - 3 He will find the Suzukis on his right.
 - 4 He will find a big drugstore on his right.
- No. 15
- 1 Nara was like a huge open-air museum.
 - 2 He was able to visit an ancient Japanese city.
 - 3 Tokyo, Kyoto, and Osaka were not impressive.
 - 4 The man could understand old Japanese.

- No. 16
- 1 She had already read all the sci-fis in the library.
 - 2 Her favorite books were mysteries.
 - 3 She was able to borrow mystery books instead.
 - 4 Her favorite books were all gone.
- No. 17
- 1 She thinks being an opera singer is difficult.
 - 2 She thinks her son's meal is imbalanced.
 - 3 She thinks an opera singer doesn't earn much money.
 - 4 She thinks eating meat every meal costs a lot of money.
- No. 18
- 1 Ten thousand yen.
 - 2 Twelve thousand yen.
 - 3 Thirty thousand yen.
 - 4 Fifty thousand yen.
- No. 19
- 1 The company wants him to make documents using the old word processor.
 - 2 Many people in his company want to use the new word processor, so he is often behind schedule.
 - 3 The old processor has less functions than the new one.
 - 4 He has found it difficult to master the new word processor.
- No. 20
- 1 He hadn't taken the coach's advice seriously.
 - 2 He had understood the necessity of warming up.
 - 3 He was good at playing soccer.
 - 4 He hadn't known what a sprained knee was.

A Study Focusing on the Method for Improving Listening Comprehension and the Teaching Materials for that Purpose

Takero Sato
Osamu Matsuda
Toshiko Sato
Tamotsu Iwata
Akiko Ishigaki
Yuri Kato
Norio Nakamura

The purpose of this study is to examine which activities and teaching materials are necessary for improving listening comprehension.

We conducted experiments in listening comprehension on 183 students. The procedure for this study is as follows:

- (1) We gave a pre-test.
- (2) We classified the students into four groups according to their different activities;
 - (a) both oral speed reading and minimal pair practice
 - (b) oral speed reading only
 - (c) minimal pair practice only
 - (d) without oral speed reading nor minimal pair practice
- (3) We gave a post-test.
- (4) We analyzed the results of the experiments.

The results of the experiments led to the following conclusion:

- ① Oral speed reading is effective for improving listening comprehension.
- ② Oral speed reading is not effective for improving the skill in distinguishing phonemes.
- ③ Minimal pair practice is effective for improving listening comprehension.
- ④ Minimal pair practice is effective for improving the skill in distinguishing phonemes.

Key Words: Listening Comprehension, Aural Perception